

発表者 松井 紀美子

テーマ 「一人ひとりのニーズに対応した多様な学び方について」

おはようございます。ゆるキャラ路線でいきますので、皆さん気楽に聞いてください。子どもの本の出版社を経営しておりまして、いろいろと教育に関することも多いですし、起業から20以上年になります。この場を借りて、皆さんに私の経験を通じた、一人ひとりのニーズに対応した学びということで、本当に気楽に聞いていただければと思います。

このプレゼンのスライドの表紙写真は今年の10月に野方図書館で開催した、野方祭りでの布絵本作りワークショップです。息子が小さいときにお世話になった保育園が母体になっているNPO法人さんが主催のもので、私が今、他区とか、流山市とかでやっているワークショップでもやっているプログラムを、いろいろやらせていただいています。これも個別最適化につながるので、スライドの表紙が文字だけですと寂しいので、ここに貼りつけています。

テーマにいきます。出版人生35年。もともとは、リクルートという会社で、海外に関する仕事をずっとやっておりました。詳しいことは、お渡ししている自己PRにあるので、そちらを見ていただければ分かりますが、かなり海外と関わりが深いところで仕事を行ってきました。私自身もシンガポールからの帰国子女で、日本と海外の教育差というのは、身をもって感じております。ただ最近では、日本もグローバル教育の環境がかなりよくなってきていると思っています。それは本当に実感しているところです。

一方で、日本が変わっているように、世界もすごく変わっています。例えば、私が受験した国際バカロレアは、当時と今では随分変わっています。あと、例えば大学進学に必要な、ほかの海外ですけれども、アメリカのSATとかイギリスのGCSE“O”レベルや“A”レベル。こちらが私が受けたときとは随分変わっています。こういう話も、個別最適化につながるのですけれども、5分で終わらないので、すっ飛ばします。

社会が大きく変化しているとは、もう皆さん感じていらっしゃるのだと思うのですが、出版の現場から見ると、一番大きく変わっているのはデジタル化です。これは子どもの教育を大きく変えました。1年、2年では分からないのですけれども、5年、10年で比べていくと、びっくりするぐらい変わっています。これは身をもって現場で感じています。

いろいろあるのですが、特に「学び」というところにフォーカスすると、やはりさっきも言ったとおり、デジタル化の影響で、コンテンツのパッケージ化、メディアリテラシー、あとはChatGPTですね。これが出てきたことによって、子どもが受け取る情報の多様化がすさまじい勢いで進化して

います。本当にGIGAスクール構想とか、コロナの影響もあって、メディアをつくっている側の人間が言うのも何なのですけども、知識が追いついていません。なので、学校の先生たち、今、デジタル教材を利用した探求学習やいろいろな情報教育が現場に入っていますけれども、かなり大変なのではないかなと思っております。スライドに書いたこういう一人ひとりのニーズに対応した多様な学び方として、これまでとは違うことが教育に求められている話もこれ以上は、もう現場の皆さんのほうが全然詳しいので置いておきます。

私の出版のことで言うと、イーブックという電子書籍の課題が見えてきているところであります。例えば、読書感想文コンクール、今はイーブックは駄目なのです。ただ、今、若い作家さんによっては、もう電子書籍しか出さないという方。紙の本を出版社を通して出さないという作家さんもいっぱい出てきています。この中にいいコンテンツを書く人もいますのですよ。それを読書感想文に書けないというのは、一人ひとりのニーズに対応した多様な学び方として、これから検討する課題かなとも出版側としては思っています。

あとは、ディスレクシア、識字障害だとか、そういう読書に困難がある方には電子書籍の読み上げ機能がついているもののほうがいいですし、副音声のあるイーブックなんかは、母語が他言語の方、外国をルーツに持つ方には優しいコンテンツなので、私は今後そういうことも含めて、読書感想文コンクールの変化は、学校の教科書は今タブレット化していますので、徐々に進んでいくとは思いますが、出版社の人間としては、もう少し深く掘り下げて研究して、子どもに合ったものをつくっていききたいなと思っております。

紙がいいかとか、電子がいいかというのは、一人ひとりのニーズに対応した多様な学び方と言ったとおり、子ども一人ひとりに対する学びの質を向上させるものだと思います。そこはメディアに関わっていると、現場も多く見ているので、そこはしっかりとやりたいと思います。

また戻りますけれども、情報過多。これはすごく大変なことになっています。このスライドを見てください。例えばこれは、谷川俊太郎さんが亡くなったときにAIコンテンツとの会話が出した嘘ですね。「自殺しました」とか、もうとんでもない嘘ばかりです。あと、こっちはちょっと違うのですけども、著作権問題に絡んでいます。どうする?! AIコンテンツ。こういう課題も解決しながら進めていく必要が教育にはあるのかなと思っています。

最後のスライドですが、個別最適化と書いていますけれども、私は子どもの教育というのは「その子どもにだけつなげる不思議な力」というのが、子ども一人ひとりに対応する教育なのではないかなと常々思っています。

ここに書いているインプットとアウトプット、これはデジタルの世界に置き換えると、こういう言い方になるのですけれども、学んだものをどうアウトプットするか。それを一人ひとりに、その子どもだけにつながる不思議な力で引き上げることが、今後のデジタル化の学びというか、特に探求学習などに、必要なのではないかなんて思っています。

その中で、中野区教育委員会にご提出した書類にも書かせていただいたのですけれども、私はSTEAM教育の可能性に注目しています。特にサイエンス、科学ですね。科学というのは、本当に子ども一人ひとりにつなげる力が強いなと思っています。例えばアリを見ても、ある子どもはアリの形にすごく興味を持ったりとか、「アリってどうして黒いの？」とか「アリって夢見るのかな？」とか、そういう子もいたり、ある子どもはアリの行列に興味を示すのです。ですから、そういう意味でSTEAM教育の学びの環境は大切です。

また、一人ひとりのニーズに対応した多様な学びには、心や福祉支援というところで、ソーシャルワーカーとかスクールカウンセラーとか、そういうところも重視したものが、今後の教育委員会に大事なのではないかなと思っています。

以上です。よろしくお願いします。

区長      ありがとうございます。出版関係ということで、イーブックスというのは、今その教科書も教科によってはデジタルになっていますけれども、学習現場で使う有用性としては、もうかなり進んでいるということだと思いますよね。

松井      その子によってかなり変わってくるのですよ。だから全てにイーブックがいいという考え方はちょっと危険だと、違うとも思っています。紙がいい子もいますし。あと、皆さんが思っているよりも、イーブックの世界は三次元化していますので、海外のイーブック、例えば、そういうカンファレンスとかに行くと、このイーブックは本と言っていいのですか？というぐらい、仮想現実の中でのデジタル化が進んでいます。環境そのものがリセットされた状態など、そういうところも含めて、新しいものを子どもに与えたほうがいいというわけではなく、検証していきながら、どれが子どもに合っているかというのを、これも、今のようなスピード感覚に流されず、もう少し一歩先を読むような形で、自治体さんには対応していただけるといいなと思っています。

区 長       それでさっきも生成 A I の話、C h a t G P T の話も出て、現場がそれに対応が追いつかないというのが、まさにコロナのときにもよく分かったことなのですからけれども、そこについてはどうやっていけばいいと考えていますか。

松 井       追いつけないというか、使ってみるといのです。例えば今日の原稿なのですからけれども、私、これ今日の朝起きて、G o o g l e の音声入力いで言いたいことを入れると、こういうふうに、すぐ原稿化されるのですね。これを A I がつくった原稿と呼ぶのか、はたまた私たちがつくった原稿と呼ぶかは、現状謎ではあります。が、ただ 1 0 0 % 言えるのは、うまく使うと先生たちの省力に、本当に役に立ちます。文字化することによって自分の考えも整理されますし、今まで 1 から手書きで、パソコンで打ち込んでいた作業がなくなりますから、本当に使い方で、先生たちの力になることは間違いないと思います。私のような出版の人間は本当に楽をしています。

区 長       ではまず生成 A I も、教育で使うというより、まず先生方が活用するということが大事だということですね。

松 井       自ら体験して、何が悪いかを、先生方がしっかり味わって、それを子どもに教えていくべきだと思います。知らないものを教えるほど怖いものはありません。

区 長       あと、そのアウトプットをどうさせるかというところ。インプットは今もやっていますけれども、アウトプットがなかなかできないから、今、教育というのはこうなっているのかなと思うのですけれども、そこはどうすればできるようになるのですか。

松 井       アウトプットの仕方も、本当に子どもが様々なので、何とも言いようがないのですけれども、確実に今のデジタルネイティブの子どもはアウトプットの仕方が私たちより上手になっています。そこをもう少し信頼すべきだと思います。何でもかんでも手取り足取り、先生がアウトプットはこうするというのではなくて、せっかくデジタル化が進んでいるのだから、先生も子どもも一緒にアウトプットの仕方をデジタル、I C T 環境で学んでいきましょいうよという姿勢が私は大事なのではないかなと。教えるのではな

くて、一緒にこれからのデジタル化を学び、先生はそこから、一歩進んで、教育としてのアウトプット対応を描いていくことが理想です。だって、私たち大人だって受けたことないですもん、情報教育。デジタルだ、アプリだとか、こんなの使って仕事！なんて、ほんと最近のことなんですから。どうもありがとうございました。